

東海の古代

第296号 2025年4月

会長 : 畑田寿一
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

日本古代の年譜

一宮市 畑田 寿一

筆者は「東海の古代291号」(2024年11月)で朝鮮半島の歴史を追って来たが、そこには素直に認めがたい課題があることが判明した。一方、我が国の古代史も『日本書紀』(以下、書紀という)は一貫して一元史観で書かれており、多くの矛盾点を含んでいる。最近、古代日本には多くの豪族が存在し、ヤマト政権はその上に乗ってはいるが実態は点で繋がっているだけで完全な支配は実現できていなかったとする説が有力になってきた。

今回は諸説ある中で比較的多くの研究者から賛同を得ていると思われる説を洗い出して、実態の在り場所を眺めてみたい。

1 過去に話題になった王朝

区分	2 C 以前	3 C 上	3 C 下	4 C 上	4 C 下	5 C 上	5 C 下	6 C 上	6 C 下
時代	弥生時代 / 古墳時代								
大王	奴国王 卑弥呼 台与 / 崇神 応神 倭五王 継体								
架空	神武 神功皇后 仁徳 (聖徳太子)→								
王朝	== ヤマト王政権 == == ヤマト政権 =====→ == 九州王朝 ===== (古田史学) ===== == 出雲王朝 ===== == イリ王朝 ==ワケ王朝 ===== == タニハ王朝 ===== == 毛野王朝 =====								
豪族	== 物部 ===== == 葛城 ===== == 中臣 ===== == 蘇我 =====								

上記の王朝は現在では大半が否定されているが、地方勢力の存在としては注目できる点が多い。一元史観からみれば書きたくない事柄であるのかかわらず、このように見える記述が存在することは、それなりの事実が含まれると考えてよい。

2 書紀などの一元史観における問題点

(1) 時代区分と古墳に対する認識の誤り

- ① 古墳時代の始まりは1－2世紀に遡るとする説もあったが、現在では弥生集落が3世紀前半まで存在し、古墳時代は3世紀後半とする説が有力になった。
- ② 前方後円墳はヤマト政権指導の許に作られたとする説が存在するが、そもそも前方後円墳を大量に作る地方とあまり作らない地方があり、ヤマトでの論理を地方に充てると説明がつかない。
- ③ 初期前方後円墳が形の整った古墳に変化する歴史が地方にもあり、果たしてヤマト王権の象徴であったか疑わしい。

(2) 大王の存在に対する検討不足

ここでの大王とは、地域（クニ）を掌握した支配者を意味している。卑弥呼や台与はヤマトに存在し、同時期にヤマト王権も存在していた。ヤマト王権が発展したヤマト政権は卑弥呼らの勢力が衰えた4世紀初頭の崇神天皇の時代に成立した。書紀では直ちに四道將軍を各地に送り日本全土の平定に着手したとしているが否定的な意見は多い。しかし万世一系の史観には賛成者が多く、神武、神功皇后、仁徳など政権がダブる大王は全て架空とされている。

特に問題なのは日本最大の仁徳天皇陵の埋葬者が比定できない点にある。批判に終始せず、埋葬者の特定に注力すべきであろう。

(3) 封建制度に対する認識の欠如

中国の支配制度は1人の皇帝が中央の官僚を使って支配する制度であり、日本の支配制度は地方の豪族に土地の所有を認め、その代わりに忠誠を誓わせる封建制度であった。この認識が欠如して、ややもすると中国流支配制度を基に論議する場合が過去には多くあった。

(4) 政局における天皇の位置づけ

上記の結果、天皇は全ての出来事に関与し指導的な立場にいたとする考え方が現在でも有力である。しかし政治は豪族の協議で運用され、天皇は統合の象徴として祭祀を中心に担当した。これは律令制度以前の宮は政治の中心の場所と言えなく、天皇の即位ごとに移動する事からも説明ができる。

(5) 歴史書は勝者の書である

勝者にとって都合の悪い事柄は抹消されるとともに、後世の研究者が自分が所属する氏族にとって都合のよいことを付け加えたと考えた方がよい。しかし全てを否定するのではなく、政局などを参考にしての適切な判断が求められる。

3 内在する課題と筆者の考え方

書紀には以上の様な矛盾点が見受けられるが、ヤマト以外に複数の勢力が存在したとすると、次の事例が問題となる。

(1) 崇神天皇はヤマトの初代天皇か

通説では神武天皇の存在を認めない。これは同じ時代に卑弥呼などヤマト前政権が存在し、神武天皇を認めると万系一世の思想が崩れることに拠る。仮に卑弥呼が九州に居たとすれば、大和地方は九州と違った文化が存在し、神武天皇の東遷も真実味を帯びる。私論

ではヤマトには物部氏を中心とした勢力が存在し、そこに3世紀中ごろ九州から神武天皇がやって来た。しかし、軍隊に拠る占領では無い。神武天皇は当時僻地であった橿原神宮付近に住み着き先住の勢力と協調しながら徐々に勢いを増していったと考えている。欠史八代を妃側から見れば地元との協調度合いが窺え、全く架空の出来事と考える必要は無い。

(2) 神功皇后は伝説の賜物か

書紀では神功皇后を3世紀の人物として扱っている。しかし、『古事記』などが示す時代観では4世紀後半と考えて良い。同時代の広太王碑には倭人との交戦の状況が記されており、神功皇后が朝鮮半島に出かけても何らおかしく無い状況にあった。ただし、書紀が記載する出来事は、とても真実とは思えない。私論ではヤマト以外に瀬戸内海を中心とする勢力が存在し、この勢力が西は朝鮮半島、東は大阪湾付近を中心に活躍していた。ただし、ヤマトに乗り込みヤマト政権を牛耳るところまでは行かなかったと考えている。

応神天皇と仁徳天皇は共に存在していたが支配地域が違っていた。ヤマトにおける古墳は自己の勢力基盤の地に造られ、ヤマト政権が関与する処ではなかった。しかし、現在宮内庁が指定する天皇の陵については大半に問題がある。

(3) 天皇の政局における位置づけは継体天皇を参考にすべき

当初、継体天皇は尾張や近江の勢力を基盤としていたが、海人族の勢力の増大に伴い、淀川沿いに勢力を伸ばしてヤマトにおける政権奪取を伺うようになった。しかし、長い年月をかけて政権奪取には成功したが1代限りで終わった。

ヤマトにおける中央豪族の力は侮れないものがあり、何代もかけて正常な形に戻す場面が多い。

4 まとめ

以上、書紀の記述と通説に対する疑問点を中心に述べてきたが、大枠の歴史観としては次の様なイメージが描かれる。

- ① 3世紀、弥生集落を中心に各地に国が形成されてきた。九州、出雲、吉備などが先進地として挙げられる。ヤマトについては諸説あるが、唐古鍵遺跡の状況からみて、先進地とは言えない状況であった。
- ② 4世紀前半、周囲の先進地からの流入により、国が誕生した。
- ③ 4世紀後半、ヤマトは急速に発展し他の地域に比べて頭抜けた勢力を誇っていた。しかし、ヤマト全体には複数の勢力が存在し、その状態は8世紀まで続いた。
- ④ 同様な状態は地方においても起きていた。この原因は渡来人によるものが大きい。圧倒的な文化水準と技術力が一時的には他を圧倒するが、中国などとの交流がなくなるとともに衰退していった。
- ⑤ その中でヤマトは封建制度を軸に各地との連携を図り、盟主としての存在を維持していた。しかし、各国との外交は九州地方での交易に併せて行った結果、中国への知名度は今一つの状態であった。
- ⑦ 5世紀になると軍勢力が重要になってきたが、国軍は存在せず、東国の軍事氏族にその力を頼った。その結果、東国に富の集約が起こり、沢山の古墳が造られた。
- ⑧ 6世紀、継体天皇の時代になると、ヤマト側も交易の利権に目覚めて「磐井の乱」が起きる。これが7世紀の中国との外交にも繋がった。
- ⑨ 朝鮮各国は自国再起の足がかりとするため、王子を日本に避難させていた。これを

人質と認識していたと書紀は伝える。少なくとも7世紀中ごろ、齊明天皇期までは日本は全方位外交を行い、飛鳥には道教的な石庭が迎賓館として造られた。これが一変して百済一辺倒になり、百済支援のため、女・子供・妊婦まで引き連れて九州に行幸した。しかし、行幸の跡地には何もなく、真偽の程は定かではない。

⑩ この結果、中国との外交の失敗により、「白村江の戦い」を引き起こした。この主導者は天智天皇とされているが、九州の豪族であった可能性は高い。

⑪ その後、日本は唐を参考にして国家の近代化を進め、書紀もこの時代に造られた。しかし、その内容には問題が多く、その後の藤原氏の改ざんにより、更に混迷を極めた。

我々が書紀などを参考とするとき、まずは前提条件なしで記述を信じるのが肝要であるが、時代の背景を読み解き、誇張・偏重が無いかのチェックを忘れてはならない。記述の解釈が後世の記述と合わないことが多く、また外国文献との整合性のチェックも欠かせない。国内の複数勢力を認める歴史観においては以前に増して複眼視の力を養う必要に迫られている。

気になる著名な学者たちの提唱

名古屋市 石田 泉城

日本の古代史を探究するには、『日本書紀』と『古事記』に記された内容をまずは信用して何が書かれているのかを読み取るところから始まります。特に正史である『日本書紀』（以下、書紀という）は、時の権力者の立場で記されているという前提を理解したうえで読むことが歴史を語る第一歩です。ところが、書紀に記されていないにも関わらず、著名な歴史学者の提唱であるが故に大きな影響力を持ち、その提唱が世間に流布され多くの国民に信じられていることが多いようです。気になる2点を挙げます。

1 渡来人

上田正昭（京大名誉教授など、2016年没）が「**渡来人**」を提唱するまで、「**帰化人**」の呼称は、世間はもとより学会においても何の問題も無く使用されていた言葉です。

それを上田は、「帰化人」は、日本中心主義で皇国史観の匂いがするので問題があると考えて『古事記』の応神記と雄略記に記された5例の「**参渡来**」（マイワタリツ、参り渡り来る）を始め計8例の「渡来」があることから、「渡来人」を採用した方がよいと提唱しました。これに関して古田武彦（昭和薬科大学教授、2015年没）は、「帰化」を中華思想に基づく制度であり差別用語とした上田に同調しています。

この『古事記』の「渡来」は総じて他国から使者などが日本に来訪したという意味で使用されています。これに対して書紀では、「渡来」は用語として1つも使われず、崇神紀から持統紀までの12例に「帰化」が使われており、こちらは日本にやって来て日本人に同化する意味で使用されていると考えられます。ですから、「帰化」は「渡来」とほぼ同意語であり、上田は、皇国史観にことさら神経質になるあまりに「帰化」を排除したと思われます。「帰化」だけにこだわり、日本を上位とする「進調」「献上」や未開の異民族を見下す「諸蕃」など多くの周辺国を下位とする用語を問題にしないのは全く奇妙です。

上田は『**渡来の古代史 国のかたちをつくったのは誰か**』（角川選書526、2013年）において、日本の国を作ったのは「渡来人」であると主張されています。本著書のあとがきで上田も触れているように『新選姓氏録』には、1182氏のうち「諸蛮」（漢・百済・高麗・新羅・任那）が327氏を占めており、確かに「諸蛮」の活躍があり、日本を形作るのに大きな影響や貢献があったのは事実でしょう。しかし、「諸蛮」が過半を占めているわけでもなく、時の日本の王権なり豪族が彼らを採用し、その技術・技能をうまく活かしたと理解すべきではないかと思います。とりわけ秦人^{はたひと}や漢人^{あやひと}などのようにヤマト王権などに仕えた技術者や知識人は、その王権や豪族に重用されなければ、力を発揮できなかったのですから、「帰化」は、かれらが日本に同化した歴史を的確に表した用語であるように思います。なお、「諸蛮」は周辺国を見下した用語です。

「帰化」の用語も含めて日本の歴史だという認識が必要ではないでしょうか。

日本の古代史の第一人者とも言えるべき研究者が、書紀編纂時の歴史認識である用語を受け入れずに蔑ろにしたのは問題があると思います。しかも「帰化」を、差別用語と誤って断じ強調したために、逆に世間に変なイメージを植え付けて定着させてしまい、さらに学問の世界まで萎縮させてしまったのは甚だ問題があると考えます。

2 騎馬民族征服王朝説

騎馬民族征服王朝説は、古墳時代に、東北アジアの夫余系騎馬民族である辰王朝が朝鮮半島を経由して日本列島に侵入し、倭人を征服・支配して統一国家を樹立したとする江上波夫（東大名誉教授、2002年没）の仮説です。日本における統一国家の出現と大和朝廷の創始が4世紀末から5世紀前半に達成されたとします。

江上波夫著の『**騎馬民族国家 日本古代史へのアプローチ**』（中公新書147、1967年）においては、独自の考えとして前期古墳時代と後期古墳時代とに区分して、その前後で文化に根本的な相違が認められるとします。そして、日本の衣装や武具などが騎馬民族のものと似ている事例を掲げ、騎馬民族が征服していく中で日本列島に騎馬民族の文化を普及させたとします。ところが、肝心の征服についての論証はなく、騎馬民族が日本に文化を普及させた経緯や動機が不明です。騎馬民族のものと似ている文化があるのは、時の日本の権力者が主体的に外国の文化を輸入したからと考えるほうが常識的であろうと思います。

騎馬民族は猛々しく、掠奪し定住しない人々という私のイメージです。騎馬民族が征服した痕跡もなく、記紀には日本人が騎馬民族であるとの記述もありません。こうした致命的な欠陥をもった仮説でありながら、著名な考古学者が衝撃的でダイナミックな展開を主張したために、歴史事実と思い込んだ日本人に誤った歴史認識を植えつけてしまったと思います。騎馬民族征服王朝説は学説としては否定されていますが、いまだに世間一般に広く知れ渡り、古代史にさほど興味の無い人でも歴史事実と信じている人は多いようです。

以上のように、書紀編纂の時代やそれが書かれた背景を十分に理解しないのか、知っていながら自己の主張に都合のよい記述のみを取り上げたのか、はたまた、いわゆる専門ばかで遺跡遺物を俯瞰的に見る能力に欠けたためにもたらした結果であるのか、いずれにしても著名な学者が、時代背景を顧みずに変に謙譲した歴史観を主張されたために、門外漢である一般人に間違った歴史を浸透させることになったのは憂うべくことと思います。

自由な発言を妨げてはなりませんが、著名な研究者は自らの主張が及ぼす影響力を知り、著名であればあるほど謙虚にかつ慎重に提唱されることが望まれます。

神社本殿の起源と変遷

刈谷市 酒井 誠

まえがき

前回の私の論考では、神の常駐する神社の創建が少なくとも7世紀の末から8世紀の前半に行われたとみてきた。ここでは、特に「神社本殿の様式」に焦点を当て古代の神社の様式の変遷を考察した。神社本殿としたのは、神社の中心の建築物はあくまで神社本殿であり、それ以外の社殿や鳥居などは付随して発展したと考えるからである。

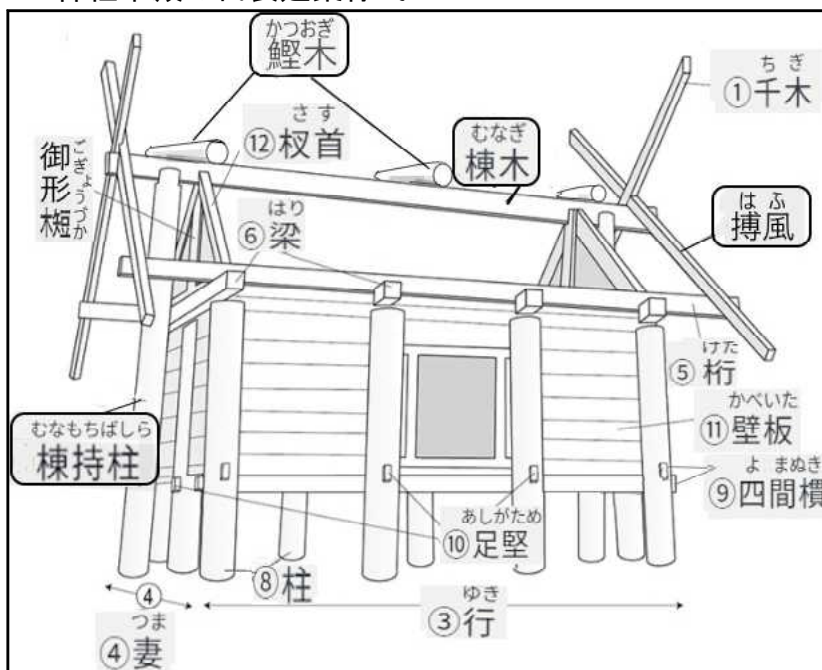
持統天皇は、崩御された年の大宝二年（702年）に、伊勢から東三河、熱田、伊賀を回って行幸されたのであるが、目的は『日本書紀』に明記されていない。何をしに行幸をされたのであろうか。

1 神社本殿の起源

『続日本紀』の完成（8世紀末）まで「神社」という言葉は発明されていなかったことを前回述べた。それまでは、祭祀と言え「社」という臨時の祭場で行われた。多くの場合において、元々は神体の対象は、社の外にあったと思うのである。時代が過ぎて、やがて神体の代わりになる対象物である、小さな祠、磐座の模造の場所、結界で囲んだ場所などを社の近くに置くようになり、諏訪大社の御射山社の穂屋のように、それが発展し神を祀る仮の小屋や祭壇になった。そもそも社の語源も、^{やしろう}屋代であり、この「代」は、身代わりの意味を表す。つまり、形代である「シロ」であって代理なのだ。

当初は臨時の祭場が作られて祭祀が行われたが、特別に対象物がなくても、^{いみだけ}忌竹や注連縄などで聖域を示して祭祀を行なった。祇園祭では、先頭を行く長刀鉾が四条通りを進み、^{なぎなたほこ}四条麩屋町に差し掛かるとそこに張られた注連縄を長刀鉾の^{いきちご}生稚児が刀で切り落とす。結界を開放し、祇園の鉾の巡行が始まる。そのように神域と俗世界を区別する概念があった。

2 神社本殿の代表建築様式



<神明造本殿・外削ぎ>



<インドネシア・
スラウェシュ島・トラジャ族>

神明造の様式は、前頁の図のとおり、①檜の素木造りであること。②丸柱の掘立式で礎石を使用しないこと。③切妻・平入りの高床式で棟木^{むなぎ}の両端を支える「棟持柱^{むなもちばしら}」があること。④萱葺の屋根の上に鰹木^{かつおぎ}が置かれていること。⑤千木は屋根の破風^{はふ}が伸びた形状であること（途中で継ぐものもある）。以上の5点であり、棟持柱のある建築は極めて珍しく、前頁の写真にあるインドネシアなど東南アジアから伝わったのではないと言われる。

(1) 柱の下に土台を持つ神社

- ・流造、春日造

(2) 柱の下に土台のない神社

- ・神明造、大社造（昔）

(3) 心御柱^{しんのみはしら}を持つ神社

- ・神明造、大社造

心御柱は、大社造りでは、内部に入っていて柱としての機能を持っている。しかし、伊勢神宮では、柱としての機能はなくどのような目的であろうか。

(4) 内部が2室に分かれているもの

- ・住吉造、八幡造

3 本殿の建築様式

神社建築は、必ず切妻であるが、それが平入りと妻入りに分けられる。

(1) 主な平入り

- ・神明造・・・仁科神明宮（長野県大町市1192年創建）、伊勢神宮
- ・流造・・・巖島神社、宇治上神社拝殿（現存最古）
- ・八幡宮・・・宇佐八幡宮、石清水八幡宮
- ・穂高造・・・穂高神社



(2) 主な妻入り

- ・春日造・・・春日大社
- ・平野造、春日比翼造・・・平野神社（京都）
- ・熊野造・・・熊野本宮大社
- ・大社造・・・出雲大社、熊野大社



<春日大社本殿>

4 神社本殿の柱の下に土台があるかどうか。

流造の神社本殿では、柱の下に（現在ではセメントで土台を作る）社殿の最下部に井桁を組んで、その上に柱を立てて神殿を作る。これは社殿を移動し、分解して解体し、組付けをしたことを意味する。社殿は常設せずに「社」として一時的な建造物として作られた。現在に残る形式として、「流造」「春日造」の建造物の土台に井桁が残る。

神明造や大社造は、古代に作られたときには掘立て柱づくりであった。

5 神社などの記念的建築物の成立（山岸常人氏の著書より）

建築や都市を持たない文化はない。それぞれの時代の文化は、そこに生み出される建築や都市の中に雄弁に物語られる。そこには、人々が生活を形成し、権力を表現しようとした軌跡が残されている。また、そこには人々の社会が生み出す矛盾やゆがみも加味して如実に現される。建築や都市には、歴史そのものが込められているのだ。

つまり、権力者集団がイメージした記念的な建造物を作ろうとする。どの人間も自分や同一集団のシンボリックな建造物を作ろうと努める。それを証拠に、身近なところでは、家の中にある仏壇や神棚が挙げられる。私の近くの家では、自宅の屋敷内に神社と思しき建造物を見る。私の遠くの親戚の家にも個人の神社があって、家族だけで管理している。そうした建造物も文化と見るならば、築造した人々の思いを知ることになり、実に味わい深い。京都の大徳寺には多くの塔頭があるが、それぞれの子寺は、戦国大名の所有物の歴史であった。

6 特色ある流造の神社である賀茂社

賀茂社には、上賀茂神社と下鴨神社がある。どちらも特色ある祭祀が行われてきた。本殿はじめ多くの建造物は「流造」という特色ある建築様式で統一されている。

この「流造」・「春日造」のグループと、「神明造」・「大社造」との基本的な違いは、神社本殿の土台のつくりである。「神明造」「大社造」には、元々土台がなくて、掘立柱を建てて作り、棟を支えるための特別な「棟持柱」を持つという特徴がある。これは古代から続いている列柱様式（高床式倉庫）に通じる。

一方、「流造」「春日造」は、井桁に組んだ土台の上に建設される。賀茂社には、遷宮という伝統はなく、本殿と権殿は全く同じ造りをしており、伊勢神宮のように遷宮をする土地の余裕もない。賀茂社では、本殿を造り替える際には、前の広場に土台である井桁を敷いて、本殿を参考にしながら基本部分の建設を進める。次代の本殿が完成した暁には、古い本殿を取り壊して、その場所に広場で作った新しい本殿を土台ごとに移動させて本殿とした。そのためには、どうしても井桁が必要になる。

神輿の下にある井桁は、この土台が延ばされたものと見ることができる。まさに、神輿は小型版の神社本殿である。

古代より各地の祭祀は、磐座や巨木、美しい風景の場所（山、川、谷、滝など）の見える場所、村の中心部にある広場などに臨時に「社（やしろ）」を設けて行われた。その祭祀が終われば社は片づけられて、次回は同じ場所を使って祭祀を行うことはしなかった。片づけられた土台や本殿の部材は、倉庫に収納されて次回の祭祀を待った。この土台を有する神社も古代からの息吹を感じるものである。上賀茂神社の本殿前にある、御物忌川のほとりにある小社の「川尾神社」も「流造」であって、土台を見ることができる。

なお、寺社の土台は、神社建築とは異っており、独立基礎の土台石を用いて建築する。日本の家屋建築はこれと似ている。



<上賀茂神社本殿>



<川尾神社>井桁がみえる。



法隆寺の土台の様子

7 神社境内にある記念的建造物群（例）

神社は、参拝する人を魅了する記念碑的な建造物を巧みに利用するケースが実に多い。

（１）上賀茂神社細殿前の立砂

細殿前にある二つの立砂は、神が降臨した神社の北方にある神山を象ったものである。これらの二つの神山をイメージシンボルとして境内に二つ作られた。よく見るとこの立砂には、頂上に、「松の葉」が奉納されている。向かって左の立砂には、「三葉の松葉」、右側には、「二様の松葉」が乗っている。個人的な解釈として、この松葉には生命力を感じる。なぜかと言えば、松の生長点は、挟まれた松葉の中央にあって、そこからやがて枝を出す。松の剪定はこの松の葉をむしり取って調整する所から始まる。生命体をイメージした記念的な建造物と言ってよい。



<細殿（ほそどの）と立砂>



<左の立砂頂上の拡大>

（２）下鴨神社の「御手洗池」

下鴨神社の奥まった所には、「御手洗池」という祭祀を行う湧水池がある。この池で行う「禊」「御手洗神事」が古代から行われてきたかどうかはわからないが、ここが「御手洗だんご」発祥の地と言われる。賀茂社の葵祭の際の、斎王代の「禊」も上賀茂神社の「ならの小川」と毎年交互に行われる。



<御手洗池全景>



<御手洗池・足つけ神事>



<飛鳥坐神社>



おんだ祭り

（３）飛鳥坐神社のおんだ祭り

明日香にある飛鳥坐神社の境内には、男女の性器を象った石が所狭しと並んでいる。そこでは、毎年ユニークな「おんだ祭り」が行われる。子作りの様子をユーモラスに劇にしたものが上演される。



（４）矢田坐久志玉比古神社

この神社の楼門には戦闘機のプロペラが奉納してある。神社を守っているのかどうかは疑問であるが個性的な神社である。

<矢田坐久志玉比古神社>

（５）廣瀬神社の入り口に展示してある大砲

大和川の河口に位置する「水」を祀る神社である。『日本書紀』にも『続日本紀』にも何度も名前が出ている。入り口付近には、日露戦争の戦利品とされる大砲が奉納してある。



<廣瀬神社・大砲>

おわりに

当初の計画では、神社本殿が時代とともにどのように変化したのか、また伊勢神宮本殿がいつごろに完成したのかを解明することであったが、伊勢神宮と比較研究する対象の材料があまりにも乏しく困難を極めた。しかも、神社本殿は掘立て柱を基本とする建築様式であり、柱がほとんど現存しないために遺跡の柱の穴（ピット）の配列を調査し分析するしか方法がない。

ただ、古代の神明造の宗教建築物は、ピットの並び方に特徴があり、本殿を取り巻く囲いがあつたにしてもすべてが掘立て柱形式で、本殿を含めて正方形を描く。こうした特徴を参考に7世紀以前における神明造らしき遺構のある遺跡を対象に研究を進めたいと考えている。

梯儼と卑弥呼は会っている―拝仮は相見を含意する― (1)

吉川市 堀口 啓一

1 梯儼・張政は九州北部で引き返したと言う不思議な説は正しいのか？

『三国志』の『魏志』倭人伝には梯儼や張政と言った魏朝の使者が倭国に来たと書かれているが、魏使は九州には上陸したが女王国^(*)には至らずに帯方郡に引き返したと主張する研究者^(**)が存在する。言い換えると、魏使は倭国には来たものの卑弥呼には会っていないと言う論説のようである。傾向としては史料を軽視する研究者やヤマト説論者が多いように見受けられるが、九州説論者にもいるようだ。取り敢えずこの論説を行路途中帰還説と命名しておくが、この不思議な論説は正しいのであろうか？

2 梯儼と卑弥呼は拝仮を行っている

梯儼が倭国に来倭した様子は、以下に記述されている。

正始元年 太守弓遵遣建中校尉梯儼等 奉詔書,印綬詣倭國拜假倭王 并齎詔 賜金,帛,錦罽,刀,鏡,采物(『魏志』倭人伝)

ここで登場するのは梯儼と倭王であるが、両者の間では拝仮と言う不思議な語が使われている。語の解釈は別にしても、この語が使われていると言う事は梯儼と卑弥呼は相見していると判断する。相見と書くと堅苦しい意味に取られるかも知れないが、対面・接見・会見・面晤・対顔^{たいがん}と言った語の同類義語であり、簡単に書くと直接会っていると言う意味である。しかし、拝仮と書かれていても梯儼と卑弥呼は会っていない(もしくは会っているとは限らない)と考える論者がいる訳だ。ならばどのような解釈なのであろうか？

3 拝仮＝拝であり拝は任命に過ぎないので会っていないと言う主張

これは拝仮＝拝と見做す解釈である。拝は次のように「任命する」の意味で使われており、

^{*1} 本論攷では邪馬臺・邪馬壹(壹)と言う国名に関する論争に関わるつもりは無いため、基本的にはどちらの名称も使わずに女王国の名称を使用するものとする。

^{*2} 例えば『国民の歴史』(西尾 幹二、産経新聞ニュースサービス、1999年)、『女王卑弥呼の「都する所」 史料批判で解けた倭人伝の謎』(上野 武、日本放送出版協会、2004年)や『魏志倭人伝二〇〇〇字に謎はない』(相見 英咲、講談社、2002年)。

拝仮＝拝と見做せば拝仮も任命であると言う主張のようである。

- ・**徴拜議郎**(『魏志』武帝紀)

- ・**拜堅議郎**(『三国志』の『呉志』孫破虜討逆伝(孫堅伝))

文章の解釈としては、卑弥呼を倭王に任命したと書いているだけで会っているとは書いていないと言う事らしい。しかし、この解釈には次の疑問を覚える。

疑問 1 : 陳寿は何故拝と書かずに拝仮と記したのであろうか？

拝仮＝拝であれば拝仮と言う不思議な語を使わず、素直に拝と書けば良い筈である。拝仮と書いている以上、拝と拝仮の語を使い分けていると言う事になる。

疑問 2 : 任命対象者(ここでは卑弥呼)を書かないのか？

拝仮倭王と書かれているが、肝腎の卑弥呼の名前が書かれていない。例えば武帝紀であれば、任命対象者を書かなくても曹操が対象である事は分かる。他の紀伝でも同様であろう。しかし倭人伝では叙任の対象は卑弥呼・難升米・都市牛利・掖邪狗と複数人に及ぶので、誰が何の官位に叙任されたのかを記さなければ混乱を招いてしまう。ならば陳寿は「卑弥呼を倭王に任じた」と書けば良い筈なのに、書いていないため不自然に思えてしまう。

行路途中帰還説では任命対象者を省略したものであると考えて次のように捉えるようだ。

太守弓遵遣建中校尉梯儁等 奉詔書, 印綬詣倭國拜假(卑彌呼)倭王

(卑弥呼)の箇所は別の箇所(例えば拝仮の間)の方が良いのかも知れないが、どこであれ大勢に影響は無い。倭王に任じられたのは卑弥呼しかあり得ないので、省略されていても良いと言いたいらしい。しかし、この解釈では次の疑問が生じる事になる。

疑問 3 : 張政と難升米が拝仮しているが、難升米を難升米に任命しているのか？

拝仮と書かれている箇所は倭人伝において他にもある。具体的には次の文章となる。

遣塞曹掾史張政等 因齎詔書, 黃懂拜假難升米 爲檄告 喻之(『魏志』倭人伝)

この箇所は張政と難升米の拝仮の場面が書かれているのであるが、もし拝仮の語意が任命であれば、**何に任命したのかが書かれていない！**

この文における任命対象者は難升米としか考えられないので、ここも任命対象者が省略されているのであろうか？ そうなると、以下のような文章となってしまう。

塞曹掾史張政等 因齎詔書, 黃懂拜假(難升米)難升米

こちらも(難升米)の箇所は別の箇所の方が良いのかも知れない。見ての通りで、**難升米を難升米に任命する**と言う摩訶不思議で奇妙奇天烈・奇怪千万な文章と化してしまうのだ。これはもう何が何やら訳が分からないが、この箇所の文意は、難升米を難升米に叙任したのでは無く張政が難升米に黄懂を与えたとしか読解出来ない。つまり、難升米は任命名称では無く拝仮の対象者なのである。

なお、拝仮と言う語の用法は対象が卑弥呼・難升米の区別無く同じ筈なので、前掲引用箇所である次の文「**奉詔書, 印綬詣倭國拜假倭王**」は、次の文「**奉詔書, 印綬詣倭國拜假卑彌呼**」と同義と言う事になる。

となると前掲の「卑弥呼を倭王に任じた」と言う解釈は誤読と言う事になる。行路途中帰還説論者はこの文章の扱いに困るようで、任命名称が省略されていると強弁する者もいる。どうやら次のように捉えるようだ。

塞曹掾史張政等 因齎詔書, 黃懂拜假難升米(いずれかの官位)

しかし、この解釈では次の疑問が生じる事になる。

疑問4：いずれかの官位とは何か？何故官位を省略するのか？

そもそも難升米は次の通り率善中郎將に任命済の筈である。

今以難升米爲率善中郎將(『魏志』倭人伝)

任命の記述が重複するのは不自然であるし、別の官位に任じられたのであれば新たな官位を書けば良く、省略する理由は何も無い。難升米に黄幢を与える箇所を拝仮と書かれていると言う事は、拝仮の意味に「物を与える」を含んでいる事になる。つまり拝と拝仮の意味はイコールでは無い事を示している。

4 拝仮は任命であり、直接会っていないと言う主張

行路途中帰還説論者は更に主張する。拝仮の語意は次の通り任命であり、任命者と拝官者(=官位を受ける者)が直接会っているとは限らないと。

- ・招答曰 昔袁公承制得有所拜假 中間違錯天子命 曹公代之言當白天子 更假眞單于是也 遼東下郡何得擅稱拜假也(『魏志』満田牽郭伝(牽招伝))
- ・汝君臣頑闇 今恃險遠 背違王命 欲擅拜假(『魏志』満田牽郭伝(牽招伝))

牽招伝は拝仮の語が連続して三回も出現している。前段(3 拝仮=拝であり拝は任命に過ぎないので会っていないと言う主張)に関連しており、語意は確かに任命なのであろうが、それならば次の疑問が生じてしまう。

疑問5：任命を行っているのでは無く任命権の口論を行っているのでは無いのか？

確かにこの伝中を読む限りでは任命者と拝官者が会っているのかどうかは読み取れないが、文脈から見て公孫康の使者韓忠と烏丸の峭王が会って単于に任じようとしていたらしい事は分かる。また、どちらかと言うとここに書かれている拝仮の意味は任命と言うよりは**任命権**もしくは**人事権**と見做した方が適切かと思える。任命権と言う一般名称として使用している場面でもあり、使者が現地に派遣されている様子が読み取れるので、任命者と拝官者が会っているとは限らないと言う主張の根拠としては適切では無いように思える。(続く)

■ 前回の会報の目次と話題

- ・古代の天文と農事暦 一宮市 畑田寿一
- ・獲加多支鹵はワカタケルとよむ
名古屋市 田沢正晴
- ・獲加多支鹵はウェカタシロ(エカタシロ)と訓む(3) 吉川市 堀口啓一
- ・新・ワカタケル考 名古屋市 石田泉城
- ・『姓氏家系大辞典』の安倍臣の項の「武渟川別の東海征伐」の内容
東海市 大島秀雄
- ・3月の論考を読んで 刈谷市 酒井 誠

■ 例会の予定

- 1 日時 令和7年4月12日(土) 13時半
- 2 場所 名古屋市市政資料館 第4会議室
- 3 次々回以降の予定
5/18、6/15、7/12、8/10、9/21

■ 投稿締切り日 4月26日(土)

送付先 toukaikodai@yahoo.co.jp 石田

年会費納入のお願い

- 1 年会費 5,000円(会報誌等送料込み)
- 2 納入期限 2025年4月12日(例会予定日)
- 3 振込先

- ・金融機関：ゆうちょ銀行
- ・名称：東海古代研究会
- ・店名：二一八 店番：218
- ・口座：普通 1299395

*ゆうちょダイレクトの利用で振込手数料無料

■ 会員の皆様でまだメルアド未登録の方はお知らせください。
連絡先 toukaikodai@yahoo.co.jp

募集中!

